



お話のおはなし

上 澤 謙 二

◇ お話の前

『お話をする』『お話を聴く』ということとは、お話というものを媒介にして、話す者と聴く者の心が結びつき融け合うことだといえよう。つまり話す者が喜びとし悲みとするところを、聴く者も喜びとし悲しみとする。そうして同じ利害を感じ、同じ運命を味わう。よく「お話は魂から魂へ」などといわれるが、それはこういうような點をさしたものであろう。

ずうつと前のことだが、倉橋先生が『幼児は話手を観察する』という文章の中で、こう書かれたことがある『話がおかしから笑うのではない、話手がおかしがつているのを感じる』のである。話が悲しいから泣くのではない、話手が悲しがつているのを感じるのである。その反対に、話手がどんなに面白くても、話手の心がうわの空だつたら、聴手は何ともない話中の人物がいかに同情すべきであつても、話手が無同情だつたら、聴手は何とも思わない』『つまり話手その人の心の動きを、その事實のままに直接受取つてゐる』と。

私はよくこの言葉を思い出す。

そうだ、まず話手が先きだ。話手が興味を持たないで、どうして聴手に興味を持たせることができよう。話す前に、話手はその話に興味を持たねばならぬ。しかしそれだけでは足りない。そのお話の中に、自分が融け込まねばならぬ。そのお話に自ら笑い、自ら泣くようになければならぬ。言葉を換えれば、話中の人物（人間と限らない、動物でも、木石でも）の悲喜憂歡が、我の悲喜憂歡とならなければならぬ。彼が我に乗りうつらねばならぬ。

ここで注意すべきは、ともすると、自分よがりの獨斷になつてしまふということである。

「これは面白い」「これは愉快だ」「これはちよつと文學的だ」などと感ぜると、すぐ「じゃあ、これを話そう」ということになる場合があると思われるが、これは全く自分の好み気分、思いつきから、主觀的にきめたもので、聴く相手のことは、直接に特別に考えていない。苟くも教育である以上『このお話は、聴手にどういう印象、影響、感化を與えるで

あろうか』ということ、入念に、綿密に、考えてみる必要がある。或は思いもよらない結果を生み出さないと限らないからである。或はそういう結果に氣づかないで、得意になつてゐるような恥かしい、否恐ろしい状態に陥らないとも限らないからである。

よくあることだが、お話を語記しようとすることは禁物である。或るところを語記するぐらゐにまで、お話になじむことはかまわないが、それは自然の結果である。片言隻句まで語記しようと努力することは不自然であり、又不可能でもあろう。そういうことにはかりかかずらうと、お話の形式だけに捉われてしまう傾向を生ずる。従て肝腎な精神を軽視するか、看過してしまふ癖がつく。

だから、それは『お話を自分のものにして』として、かえつて自分のものにならないで『借物』にしてしまふ反對な結果になる。何となれば表われた部分を鸚鵡返しにおぼえたと過ぎないからである。謂わば衣裳だけ借りた物眞似に終つてしまふからである。

讀み且つ味わい、味わい且つ讀み、かくて幾度か繰返すうちに、そのお話に通曉してゐる。即ちその内容と形式、精神と表現が、だんだんしつかりと把握されてくる。『自分のものになる』とはこのことである。それで自分の意志自分の言葉で話せるようになる。原作と同じような言葉で話されたとしても、それは『努力した語記』でなくて『自然の一致』であらねばならぬ。セントジョンが『記憶で話すのでなく心で

話す』といつたのは至言である。

しかしそれではまだ足りない。更に使命感が加わらないと完全とはいえない。

『使命感』とは、そのお話に對する話者としての責任感、光榮感である。話中に含まれてゐる精神乃至目的に深く共鳴して『どうかしてこれを聽手に吹きこまなくては』という強い欲求に驅られることである。そしてそれを意味深い自分の仕事の一つと考えることである。子供たちに向きあつて『この機會に一生の賣ともなるものを與えよう』という烈しい念願に燃えることである。

かくてお話に活きた力と生命が宿つてくる。それで聽手はそのお話を理解するという以上に、又興味をそられるという以上に、精神に同化し、目的に融合するという、偉大な賜物を受けるのである。

話手としてはそういう深い自覺に立つことが望ましいが、それは寧ろ幾何かの經驗を積んでからのことで、初歩の時代には必ずしもそこまでならなくても、又なれなくてもよい。兎に角『このお話をして、あの子供たちを喜ばせてやろう』と念ずる心が『このお話ならばきつと清い喜びを覺えるに違いない』と信ずる心がそうしてその場合を想像して、あの子供達の喜ぶ顔が見えるぐらゐの心の近さ親しさが湧けばよい。

そのお話は、きつと相手の心に何者かを與えないではやまないだろう。

もう一つ付け加えたいのは、話手の身なり身じまいに關す

ることである。

或るところで、こういうことに遇つた。

若い保母さんがおはなしをしている。大勢の子供が聴いているが、たいがい或る一点に見入つてゐる。その視線を追うと、保母さんの正面の腰のところに集つてゐる。そこには何があつたか？ しめてゐるバンドの大きな金具が、まばゆいほど光つてゐた。子供たちの目はそれにひかれていたのである。動いたびにキラキラと光る、光るたびに子供たちの目もキラキラと光る。その保母さんはそれには氣ずかないらしく、にこにこして話してゐたが、子供たちの目が光るだけそれだけ。お話に對する耳がお留守になつてゐたことはいふまでもあるまい。

これは卑近なことであるが、それだけに知らず識らずのうちに行われてゐることが、案外多いのではなからうか。

いふまでもなく、話手はお話のうしろに潜まねばならない例えば子猿のお話をしてゐるとすれば、勿論それは話手が話してゐるのだが、聴手としてはそこに話手を見ないで、子猿を見るのである。もしそこに卒然として話手自身が現われるようなことがあれば、途端にお話は二つに割れて失敗に歸する。

話手は目立たないのをよしとする。この點からすれば、特に髪を垂れ、眉をひき、頬を彩どり、唇を染めるような厚化粧は、他の場合はいざ知らず、お話の時は避ける方が無難であらう。

◇ お話のはじめ

すべて物事は「はじめが大切」といわれる。お話もこの例に洩れない。

何か初めにつまづくと、それによつて聴手の間に生じた異常感を取戻すまでには骨が折れる。時にはそれがおしまひまでこびりついていて離れぬことさえある。

まず聴手に安定感を與えることが大切である。それは話者の落着ついた態度と、聴者に對する親しい感じから生まれる。そそくさと前へ出て、ドサリと腰かけて、いそいで話し出すというようなのは、大凡「おちついた態度」の反對である子供たちは話を待つてゐる。その期待を裏ぎつてはならないというような考えから、ついせきこむような態度になり易いので、心せねばならぬ。

私は席についたら、一わたりぐるりと子供達を見まわすことにしてゐる。ゆつたりとした態度で、にこやかな顔つきで。

そうすると子供たちもたいがいにこにこ顔になる。「先生は善意と好感をもつて私に對してゐる」といつたような感じは湧いてくるのだらう。これが即ち安定感であり、親しみである。見廻し終つて顔をもとへ返して、ぐつと一息入れる。そうして話し出すのだが、話し出す前に、子供たちの口から早くもエヘーという笑い聲が出てくることさえある。それは彼等がいかに楽しい氣持になつたあらわれで、安定感と親みに溢れた證據といつてもよからう、その時は私もいつしよに笑顔になる。それから話し出す。

この「見まわし」は、話し出す時間を延ばすことによつて

相手の期待を強めることもある。かくて安定感と、親しみと期待と三者が併せ起れば、注意が深まり、感受が鋭くなつておのずから集中した気分がその場に生まれる。即ちお話に對するアトモスフィヤが出来るわけである。それでお話は滑かに又力強く出發するのである。

心すべきは長きに失しないことである。「おちついて一わたりに止める」ことである。時間的にはほんのちよつとしたことが、この「見まわし」はいろいろな働きを持つから、大に工夫する必要がある。殊に簡潔を旨とする幼児ばなしに在つては、相手と親しくなるため所謂「まくら」などを用いることは避くべきで、その點からしても、これはいよいよ意味があると思われる。

◇ お話の最中

いよいよお話がはじまる。

その運び方の實際については、實にいろいろなことがいわれている。一言一句、一舉手一投足の微細な點にまで説き及ぼされている趣がある。しかし考え込んだらキリがない。のみならず、餘り細かいところにまでこだわると、かえつてそれが束縛になつて、固くなつてしまふ恐れがある。お話の世界の基調は飽くまでも自發自由なるべきである。何となればお話は「活きたもの」だからである。それだからこそ、眞の興味も感化も生まれるからである。

そこでここには、参考になる『節々』ともいふべき幾つか

を擧げることにする。

所謂『いい方、言葉つき』で、言葉のいいまわしには、それぞれその人の癖があるものである。日常の會話の際はまだしも、大勢への話になると、それは甚だ目立つてくる。のみならず、或はお話の流れをせきとめたり、或は意味を不明瞭にしたりさえる。

例えば「そうして」「それから」「そのう」「あのう」「そこで」「つまり」「さて」「ええと」などの連發である。これには聽手はうんざりし、やがては嫌惡するようになるだろう。

それから印象を強くしようとして、猥りやたらに最上級のな感歎詞を使うことである。「最も」「とつても」「大に」「非常に」「うんと」「何とまあ」「ああ實に」など。かくて法外に誇張された表現は内容とチグハグになり、力めば力むほど空になつて、かえつて力はなくなり、徒らに聽手を面喰わせる。そればかりではなく、聽手は強い表現に不感性になり、いよいよ感動に捲き起さねばならないクライマックスになつて、いくら聲を大にし言を勵まして、相變らずの顔をしていて、一向通じないというような滑稽ともいふべき失態を齎らすようにもなるだろう。

語尾にも氣をつける必要がある。なれは一つのしめくくりであるからはずきりせねばならないのだが、そこへ來るとかえつて聲を落して不明瞭になつたり、早口に片づけて不調和になつたりする向がよくある。「ます」なのか「ません」なのか、イエス、ノーが分らないようなことさえある。所謂

齒ぎれのよい言葉は、語尾がはつきりしているが、これは印象を鮮かにし、理解を明かにし、お話を繪のようにして見せる上に、大きな助けとなることを忘れてはならない。

次にパウズである。パウズとは『小休止』である。ちよつと言葉を切つて休む瞬間の作用である。『休む』とは『無活動』を意味する消極的な状態である。とにろがこの『消極的無』は、適當に用いられれば、かえつてお話を活躍させ立體化する積極性を持つことになる。もしこれがなかつたら、お話はただだらだらとつづいて、もやもやとひろがつて、無味單調になり、更に曖昧模糊になつてしまふ。殊に段落の場合――發端から本筋へ、頂點へ、結末へというその間には、是非必要である。それは方向轉換の合圖ともなり、氣分轉換の機會ともなる。

猶、事件に大事が起る直前、話の筋がいよいよクライマックスに達する手前などに、パウズが利用される。話手からすれば息を呑み込んで力を入れる場合となり、聴手からすれば期待を昂められて目を光らす段階となる。

顔の表情としくさ即ちゼスチアについては、目をこう開けとか、手をこう出せとか、これ又種々やかましくいう向もあるが、つまりは自然に任せるということが本筋であろう。事實、表情とか仕料とかはお話の變化進展に連れて自然に變り、自然に出てくるものだからである。そうして自然に出てくるそれが、その人としてその場合、最も適した表現だからである。それは大會場にひしひしと詰めかけた兒童大衆にお話する

時は、大勢の注意を一點に集め、雑多な氣持を同一にまとめるために、又最小の努力で最大の効果を擧げるために、技巧技術が要求されて、従て表情やゼスチアなども特に研究される種の型のよなものが表示されることにもなる。然し小數のしかもごく無邪氣な幼兒を相手のお話には、技巧技術よりも自然さ親しさの方が遙に大切である。言を換えていえば技巧技術に拙なくても自然さと親しさがあれば、お話は相手の心に素直に受入れられるし、いくら技巧技術が巧みでも自然さ親しさに缺ければ、お話は表面的な興味を擦過するに過ぎないということになる。

だから、特にうまくやろう面白くやろうなどと、構えたり力んだりしないことだ。況んや『ここでこういう身ぶりをしよう』などと豫定しないことだ。いかに名人の仕料でもそのまま眞似などしないことだ。約言すれば、特別な人爲的小細工を弄しないで、自分のありのままを、愛と熱とをもつて表現することである。

然し勿論顔の表情は變り、ゼスチアは出るにちがいない。それは自然である。變らなければならぬし、出なければならぬ。それなら表情とかゼスチアとかは、體どういふ意味があるのか。これについては、エグレストンの言葉を引こう。曰く「想像を助けることを感情に訴えること」と。恐らくこれが最も簡明な説明であろう。

さて、お話をしている最中に、話者自身としてはどんな心理が働くであろうか、又働くべきであろうか。

もし聴手のことゝが氣になつて、どこかで動いたらハツとなり、誰かが立ちあがつたらドキンとするようだつたら、それはいらざる心配である。屢々初歩の頃にこういふ心理が働く。『もつと大膽に』というより『もつとお話そのものを見つめて』話すべきである。

又もし聴手が一齊にこつちを向いてゐる顔々、その笑い拍手などが、目につき耳に入つて、いい氣持になつてしまつてしやべりまくるようだつたら、それは警戒せねばならぬ。幾度かお話の經驗をして或る程度になつた時、屢々かういふ心理が働く。これは『自己陶醉』という魔薬にひつかかつたのでやがて獨善に陥り、正しい進歩がとまる恐れがある。

『話しながらそのお話が繪のように見える』かういふ心理も働く。これはお話がはつきり客觀化されたからで、そのくらい明瞭なイメージを持つたようになったのは、話手としての修練を積んだことを物語るものといえよう。

更に又別な心理が働く。それは話してゐる間は我を忘れてしまうのである。例えば親にはぐれた子猿の話をしてゐるとすれば、子猿の心持になりきつてしまふ。端的にいへば、その時の話手は何某先生でなくて『子猿』である。見榮も體面もない。氣取りもおすましもかなぐり棄てる。全くお話の中に没入して、子猿となつて歎くのである。だから聴手はそこに何某先生を見ながら、その人を見ないで『子猿』を見ることになるのである。話中の話者の心理は、ここに至つて至境に達したものだといえるであらうであらう。

◇ お話のおわり

おわりは總括である。お話の全體がしめくくられるところである。折角のよきはじまりも、發展も、頂點も、終りぎわの失敗で臺なしになつてしまうことは、その例少なしとしない。ぐずぐず、低徊は禁物。さらりと終ること、しかも心を籠めて力を入れて終ること——などよくいわれる。

ところで、そういわれる所以は何か。

一つは餘韻を賦するためである。ここに餘韻とはお話の影響感化を、聴手の心に止める働きである。止まれば、おのずからそれについて思い考えることになる。それは誰から命令注文されたのでもない、全く自分からである。自發的作用である。かくてそのお話は彼自身のものになるのである。

その二は、動機を與えるためである。ここに動機とは、お話を實行に結びつける働きである。それにはよく暗示的課顯的方法が用いられる。例えば『ころんで泣かない子供』のお話をして、終りに「あなたがたはどう？　ころんでも泣かないでしようか？　きつと泣かないわね」というようなそれである。いわれた子供は意欲を刺戟されて、その通りにしようとする。かくてそのお話は生活化されるのである。

これを、幼稚園の園児たちに應用する時は、それがなじみであり、少數であり、更に幼児であるの故をもつて、一段明瞭な直接的方法を採つてもよいと思う。私はこんなことを試みるのである。

前述第一の餘韻を賦する場合。

お話が終つて一息すると、すぐ、しかし靜かにこんなにいる

「はい、みんなお目々をつぶつて、だまつて、……………」

みんな目をつぶつたら、こう加える。

「今のお話、どんなお話だつたかしら」

それはけつして長い時間ではない。一分間以内。その間に、

子供たちは思うともなく感ずるともなく、或は再考に似た、

冥想に似た、反省に似た心持に導かれて、お話の餘韻をより

深め、より味わうことになるだろう。

前述第二の動機を興える場合。

例えば、ころんだお友だちをおこして、家へ連れていつた

お話をしたとして、終ると、すぐ「さあ」と、聲をかける。

「さあ、みんな両手を出して」

話手である先生が出すと、話手である子供達は皆それに倣

う。

「ころんだ仙ちゃんをおこしてあげるの。ウーンウーン」

先生が力を入れてひつばる眞似をすると、子供たちもその

通りにする。多分両手には本當に力が入つているだろう。

「さあ、おきた。ああ、服についたほこりをおとしてやりま

しよう、パタパタ」

先生がたたく眞似をすると、子供たちもその通り。

「ああ、きれになつたわね。さあ、お手々をひいて連れてい

つてあげましょう」

そういつて、先生も子供たちの列へはいつて並んで、手を
取るのもよからう。それに倣うと、みんなの手がつながらだ
らう。それをふるのもよからう。ふりながらこんなというの
もよからう。

「一、二。一、二。」

四五回くりかえして、やめて更にいう。

「さあ、とうとう仙ちゃんのおうちへ来ましたよ。はい、お

しまし。」

そうして手をはなして、子供たちに禮をする。子供たちも

禮をする。

このような簡単な仕料を加えるだけだが、このことによつ

て子供たちは耳から受入れたお話を行動に移してたしかめて

知らず識らずのうちに、實行への興味と傾向に導びかれるこ

とになるだろう。

勿論これはどのお話にもそうするというのではない。その

お話の性質にもより、目的にもより、又その場合の雰囲気にも

よる。いつ、どうするかは話手の洞察と熟練に懸るわけである

◇ お話の後

かくてお話は終りとなる。お話は終るが、話手としての任

務はまだ終らない。

そのお話の外的關係や内的經過について、篤と検討してみ

る必要がある。これこそほんとうのしめくりだろう。

四、社會的生活

- 1 自分ばかりを主張しない
- 2 友達をいたわりお世話をする
- 3 自分の事は自分でする
- 4 きまりをよく守る
- 5 間違つた時にあやまる
- 6 人の話をよく聞く
- 7 ごつこ遊びがよく出来る
- 8 うそを言わない

右の品等法は三段階とする。

五、行動の發達と記録

- 1 友達とよく遊ぶ
- 2 他を認め自己を主張する
- 3 自分より小さい者をいたわる
- 4 責任を重んずる
- 5 禮儀正しい
- 6 きまりを理解して守る
- 7 安定感がある

最後に私がミス・アンブローズ女史から受けたサゼクションの中でどうしても皆様にお伝えしたいと思ふことを二三のべておわりにいたします。

○何かの研究にあたる場合には必ず大

きな問題を細い項目に分けて考え、

一つ／＼を正しく研究すること。

○研究項目について一つ／＼研究した

事を必ず具體的に(その研究過程)

書いて見る又一人／＼が研究した事

を發表報告し合ふ(その場合どんな

小さな問題でも、又發言の内容が貧

弱でもとりあげて考えること、二三

の少ない人の發言や研究を中心にし

て結末を早くつけたいこと)

○自分の體驗したこと、研究した事を

ありのままに紙に書き表はすことが

研究の第一歩で又一番大切なこと

である。(下略)

(三六頁より)

そのお友達が何々と次に表現する動物の名を

いう)をしました。どのレクリエーションよ

りも、優れた効果をあげ、満場破れるような

拍手喝采をなくし、其の日から幼稚園の先生

の眞價が大いに認識され、翌日の授業評價の

時には、指導主事の意見として「今までどう

も幼稚園の先生のように、子供の生活の中

に入つて、指導するという點がかけていた。此

の點我々は幼稚園の先生に大いに學ぼうでは

ないか」と云つて戴きました。又閉會の時の

縣當局者の挨拶の中でも「幼稚園を可愛がら

う幼稚園を參觀して幼稚園の先生に教えても

らおう」という言葉がいく度か聞かれ、この

集會は幼稚園の認識を高めて貰うための會で

あつたようにすら感じられたことでした。

(一六頁より)子供との關係に於てどうだつたか、自分の豫想や期待に對してどうだつたか。これは自分ばかりでなく、同じ職にある友達と話し合うのも大に意味がある。多分何等かの不満不足を見出さないことはあるまいと思ふ。

私なども度數に於てどのくらい子供たちに話したか知れないが、未だ嘗て『

これで充分、これで満足』ということがあつたためしがない。つくづくお話の

世界の奥深いことを感ぜざるを得ない。恐らくそれは無限であらう。努力は無

限であり、骨折は無限であり、精進は無限であるだろう。しかし、だからこそ

その意義も無限である。喜びも無限であり光榮も亦無限であるだろう。